

くに「経営システムと支配システムの両義性」という観点を提出したい。

## 二、協働連関の両義性

(1)「協働連関」という言葉はマルクスが使ったもので、ドイツ語で *Zusammenwirkung* であり、実体的には社会システムに係わる社会的行為の総体である。協働連関は「経営システムと支配システム」という意味で両義性をもっており、「対象的に客観的なシステム」と「主体的に主観的な行為の集合」という意味での両義性をもっている。ここでは前者の「経営システムと支配システム」という意味での両義性を中心に考えてみたい。

経営システムとは経営課題群の継続的充足のシステムと定義できる。また支配システムは2つのモメントから形成される。その第一は意志決定の文脈で、個人的意志決定と社会的（集合的）意志決定が考えられ、垂直的政治システムである。第二の契機は価値配分の文脈から閉鎖的受益圏の階層構造である。この場合の閉鎖的受益圏とは、外部に出た場合には得られないような個々の欲求充足の総体である。閉鎖的受益者の階層構造とは、このような受益圏が重層的に閉鎖性と対外配分格差とをもちつつ形成されるものである。

経営システムと支配システムの両システムは実体的な区分ではなく、社会のどの面をとり上げてもこの両義性がからみ合っている。企業・政府・労働組合、大学組織、宗教組織などなど社会のあらゆる断片に浸透している。また主体布置の形態としては扇型関係とし

## 「協働連関の両義性論からみた計画問題」

一、はじめに

法政大学 船橋 晴俊

社会計画を考える場合に基礎視角として「協働連関の両義性」と

である。

(2)次に両システムにおける解決されるべき問題の設定のされ方の差をみる。

経営システムの文脈で社会的問題となるものは第1に「経営問題」——いかにして最適な経営方法を発見し、経営システムの存続と発展を実現するかという問題であり、第2に、その特殊な形としての「被圧迫問題」——例、大型店と従来の商店街——である。

支配システムでの社会的問題は、被支配問題——例、公害の被害、失業、職業病、労働災害等——、支配問題——上の問題を支配者からみたもの——である。

(3)経営システムと支配システムの存立の相互連関を基本的構成原理の水準からみると、支配システムは経営システムを包摂している。いわば、支配システムの方が優越した枠組と考えられる。具体的には二つの論点がある。その第1は、支配の確立によって経営システム内の統率者の指示の実効性を保証することである。円滑な経営がもっとも難しいのは政治システムと対決の状態にあるときである。

第2は垂直的政治システムを通じて人びとの欲求を経営課題へ転換することである。経営課題の設定は経営システムの内部で自動的に決まることなく、政治システムの中での要求提出と合意形成によって決定される。

三、「経営システムと支配システムの両義性」という観点からみて社会計圖論において留意すべきこと。

#### (1)社会工学的発想の限界性

社会計圖は、社会システムの作動についてなんらかの科学的知識を意図しながら社会を制御しようとする実践的思考の総体であるといえる。社会計圖には非常に多様な潮流があり、その部分として社会工学的実践があり、さらにその中であって、対象認識と最適手段発見のためにシステム工学の手法を転用しようとするのが社会工学である。

社会計圖は社会工学的な要素（経営システムの文脈での最適手段発見）だけでなく、政治的要素、いいかえれば、支配システムの文脈における目的設定あるいは制御努力の実効性といった問題が含まれる。

(2)支配システムが経営システムを包摂している。

社会計圖は、経営システムの文脈と支配システムの文脈とを同時に展望しなければならない。社会工学へ矮小化されてはならない。

経営システムの目的群（経営課題群）を設定し、修正するのは支配システムである。経営システムの前提となる枠組をどう定義するかが問題で、下からの運動が支配者や統率者に対して要求を提出し、目的群を再定義させることもある。計圖は、このように、運動とからみあったダイナミックなプロセスである。

また、巨視的文脈での支配システムのありようが微視的文脈での個々の経営システムを包摂しているのである。

#### 四、農村計圖の諸問題点

(1)マクロミクロの二重の展望と計圖の必要

マクロの文脈では、農業、農村の進むべき長期的、戦略的方向は何か、産業構造の中での農業位置づけ、ウェイト、GNPの中での農業のウェイト、就業人口の中での農業のウェイト、地域人口動態などをみなければならぬ。

ミクロの文脈では、各地域の自立的な経済基盤、生活基盤をいかに主体的に作り出していくか、これを両義性論の文脈にひきつけて考えてみると、地域の水準での経営システムの動態化の問題——問題形成、批判的現状認識、集合主体形成、潜在的資源の発掘などがある。

マクロとミクロのそれぞれの独自性と整合性をみていくことも必要である。マクロ的進路に沿ったミクロの努力やマクロに逆行するミクロの努力など。

(2) 支配システムと経営システムという二重の視角で計画を考える必要

経営システム論の文脈で社会計画を考える際に大切なのは、個別の経営システムにとっての環境（外的条件）の変化の予測である。（contingency theory 「条件適応理論」の基本的発想）。予測せざる条件の出現が、さもなくば適切だった計画を挫折させていく。これまでのさまざまな政策努力をこの観点から検討すべきであらう。

支配システム論の文脈で計画を立てる場合の重要な主題として二点あげておく。巨視的資源配分格差をいかなる戦略で是正していくかという問題がその一である。これは、マクロ的な格差を放置した

まま、ミクロ水準の経営努力だけで改善しようとするものの限界、

移転あるいは贈与による蓄積のかたよりの是正といったものである。つぎに先鋭的な deprivation（被格差、被支配問題）を防止、補償をするためにいかなる努力がなされるべきかという問題である。これは地域破壊的な外部からの投資の拒否の問題や marginalization の圧力への対処の問題などがある。

(3) 環境要因としての都市部、第2次、第3次産業との関係の重要性  
都市から農村、第2次、第3次産業から農業へのインパクトをどう予測していくか、第2次、第3次産業の発展が農村・農業にとって解体的圧力、圧迫発生源としてではなく、建設的促進的に作用する回路はないのか、農村地域への人口定住という課題の中に非農業人口をどう位置づけるか。将来、農村にはどういう人がどれだけ住むのがよいのか。

都市との調和あるいは連帯という方向で改善された地域の事例はないのか。農村地域における戦略的成長産業は何か。工業的サービス産業の要素を農村に導入した場合、それが外部資本に支配されるのではなく、地域の民力で上昇につながるような道は何か。

(4) 今までなされてきた政策努力の効果測定の必要

戦後の農政の諸政策の意図と実際の効果を比較することは大切である（evaluational approach）。今までの政策努力の中に失敗や的はずれがある場合、その理由は何か。客観的主体的要因分析。

さまざまな財政支出、補助金の実効性はいかなるものであったか、

そして今後、財政支出の優先順位をどう考えるか、効果のうすいものを効果の大きいものにふりかえるにはどうしたらよいか。

政策の中でも、長期的に見た戦略的發展方向を切り開くようなものと、防衛的、うしろ向きの、緊急避難的なものがあるであろう。この観点からさまざまな政策を位置づける必要性があり、また両者のバランスをどうしたらよいか。

〔文責 事務局〕